

滋賀県におけるチャ主要品種の有機栽培適性

【要約】チャ品種の‘めいりよく、ふうしゅん’は、有機栽培下でも病害虫の被害が少なく年間通して生育が優れるため、有機栽培に適性を有する。また、‘おくみどり’は、有機栽培下で一番茶の品質が最も優れる。

農業技術振興センター・茶業指導所

【実施期間】 令和2年度～令和3年度

【部会】 農産

【分野】 競争力の強化

【予算区分】 県単

【成果分類】 指導

【背景・ねらい】

本県において有機栽培への取り組みが拡大する中、これまでに有機栽培茶の安定生産、品質向上を目指した技術として、耕種的防除などを組み合わせた病害虫管理技術や春肥に重点を置いた施肥技術などを開発してきた。今後、さらに生産の安定を図り、有機栽培茶の生産拡大を実現するためには、有機栽培に適性を有する品種の選定が重要である。

そこで、チャの主要な6品種について、本県における有機栽培適性を検討した。

【成果の内容・特徴】

- ①有機栽培下で年間通して生育が優れるのは、‘ゆたかみどり、めいりよく、ふうしゅん’である。一方、‘おくみどり’は、二番茶の生育が不安定である（図1）。
- ②生育が優れる‘ゆたかみどり、めいりよく、ふうしゅん’は、チャノミドリヒメヨコバイ（以下、ヨコバイ）や炭疽病の被害が少ない（図2）。
- ③特に二番茶芽の生育には、二番茶期のヨコバイの被害が影響し、被害が小さい品種では摘芽重（≒生葉収量）が多い一方で、‘やぶきた、おくみどり’のように被害の大きい品種では摘採が不可能になる場合がある（図2）。
- ④‘おくみどり’は、一番茶品質の指標となる全窒素含有量が最も多く、一番茶摘芽重の増加（≒生葉収量の増加）に伴う全窒素含有量の低下（≒品質の低下）が他の品種より緩やかである（図3、4）。

【成果の活用面・留意点】

- ①茶業指導所の品種見本園における有機栽培開始1年目および2年目の試験成果である。施肥体系は、菜種油粕を主体として年間施肥量を48kg-18kg-21kg（N-P₂O₅-K₂O：10a当たり）、病害虫防除は2年目（2021年）に耕種的防除（一番茶後せん枝）のみを実施した。
- ②‘ゆたかみどり’の有機栽培適性は高いが、暖地向け品種であるため、寒冷地である本県では凍霜害のリスクが高い。
- ③本成果は、有機栽培茶の生産拡大と品質向上に寄与する。県内の栽培面積は、‘めいりよく（1.4ha）、ふうしゅん（4.7ha）、おくみどり（14.6ha）’である。
- ④‘おくみどり’は覆い下栽培に適した品種であるため、一番茶において高品質な有機かぶせ茶や有機てん茶の生産が期待できる。また、耕種的防除等によって二番茶期のヨコバイ被害を回避できれば、年間通して安定した生育が確保できる。

[具体的データ]

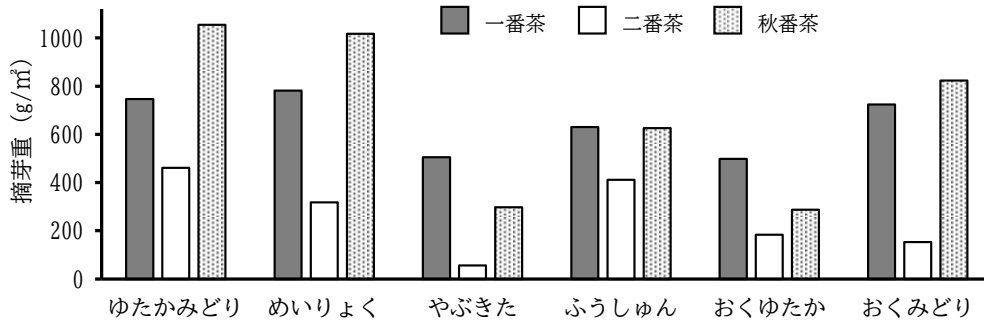


図1 有機栽培下における供試品種の収量性 (2か年平均)

注) 摘芽重は20×20cmの枠摘み調査による (以下の図も同様)
 ‘ふうしゅん’の一番茶は2020年のみのデータ

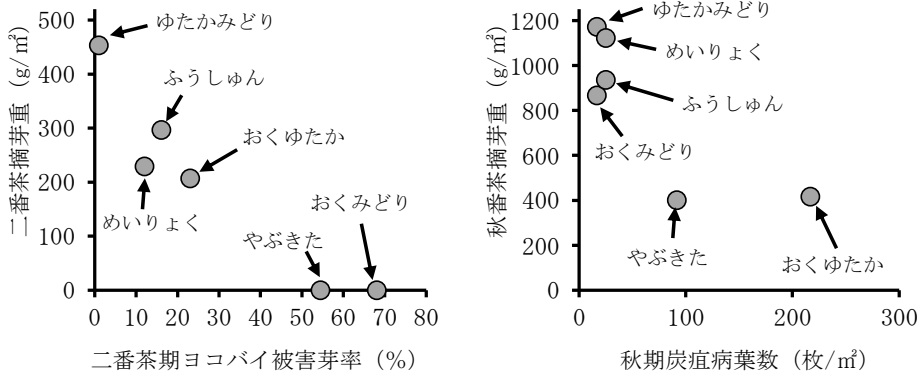


図2 病害虫による被害と二番茶および秋番茶生育の関係 (2020年)

注) ヨコバイ被害芽は20×20cm、炭疽病葉数は25×50cmの枠内調査による

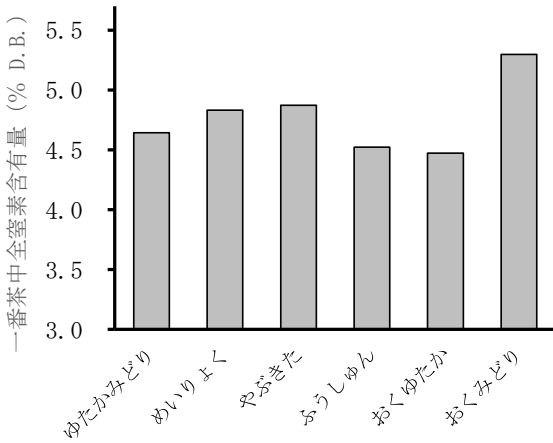


図3 一番茶中全窒素含有量の品種間差異 (2か年平均)

注) ‘ふうしゅん’は2020年のみのデータ

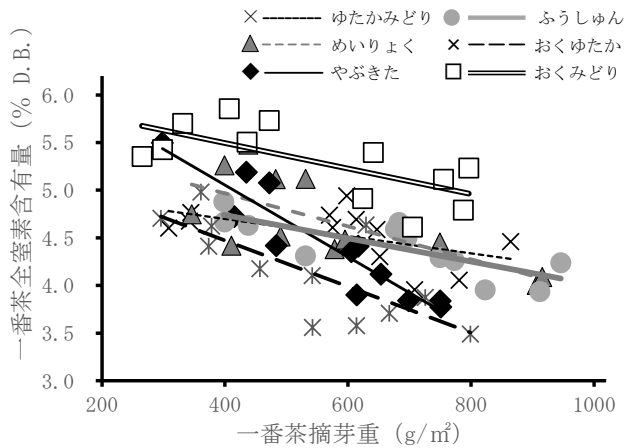


図4 一番茶芽の生育に伴う全窒素含有量低下の品種間差異 (2020年)

[その他]

・研究課題名

- 大課題名：経済活動としての農業・水産業の競争力を高める研究
- 中課題名：需要の変化への対応と農地・農業技術等のフル活用
- 小課題名：県内普及品種における有機栽培への適応性

・研究担当者名：忠谷浩司 (R2~R3)

・その他特記事項：

成果を日本茶業学会研究発表会 (令和3年11月10日、オンライン) で発表した。
 試験研究技術的要請課題 (平成29年、令和元年：甲賀農産普及課)
 政策的試験研究課題 (平成29年：農業経営課)